

病牀雜記

芥川龍之介

青空文庫

一、病中閑なるを幸ひ、諸雑誌の小説を十五篇ばかり読む。滝
 井君の「ゲテモノ」同君の作中にも一頭地を抜ける出来栄
 なり。親父にも、倅にも、風景にも、朴にして雅を破らざること、
 もろこしの餅の如き味はひありと言ふべし。その手際の鮮かなる
 は恐らくは九月小説中の第一ならん乎。

二、里見君の「蚊遣り」も亦十月小説中の白眉なり。唯聊か末
 段に至つて落筆の憾みあらん乎。他は人情のか何か知ら
 ねど、不相変巧手の名に背かずと言ふべし。

三、旅に病めることは珍らしからず。（今度も軽井沢の寐冷
 えを持ち越せるなり。）但し最も苦しかりしは丁度支那へ渡ら

んとせる前、下の関しもせきの宿屋に倒れし時ならん。この時も高が風邪かぜなれど、東京、大阪、下の関と三度目のぶり返しなれば、存ぞんぐわ外い熱も容易には下さがらず、おまけに手足にはピリン疹しんを生じたれば、女中などは少くとも梅毒患者位には思ひしなるべし。彼等の一人、僕を憐あはれんで曰いはく、「注射でもなすつたら、よろしうございませうに。」

東雲しののめの煤すすふる中や下の関

四、彼は昨日「小咄文学」を罵り、今日恬然こんにちてんぜんとして

「コント文学」を作る。宜うべなるかな。彼の健康なるや。

五、小穴隆一をあまりゆういち、軽井沢の宿屋にて飯を食ふこと五碗ごわんの後女のち

中の前に小皿を出し、「これに飯を少し」と言へば、佐佐木茂索ささきもさく、

「まだ食ふ氣か」と言ふ。「ううん、手紙の封をするのだ」と言へど、茂索、中中承知せず「あとでそつと食ふ氣だらう」と言ふ。隆一、慚然^{ぶぜん}として、「ぢや大和糊^{やまとのり}にするわ」と言へば、茂索、愈承知^{いよいよ}せず、「ははあ、糊^{のり}でも舐^なめる氣だな。」

六、それから又玉突き場^ばに遊びゐたるに、一人^{ひとり}の年少紳士^{しんし}あり。僕等の仲間に入れてくれと言ふ。彼の僕等に対するや、未だ嘗^{いまかつて}

「ます」と言ふ語尾を使はず、「そら、そこを厚く中^あてるんだ」などと命令すること屢^{しばしば}なり。然れどもワン・ピースを一着^{いっしやく}したる佐佐木夫人に対するや、慇懃^{いんぎん}に礼を施して曰^{いはく}、「あなたはソオシアル・ダンスをおやりですか？」佐佐木夫人の良人^{をっと}即ち佐佐木茂索、「あいつは一体何ものかね」と言へば、何度も玉に負けた

る隆一、言下ごんかに正体を道破して曰いはく、「小金こがねをためた玉ボオイだらう。」

七、輕井沢かるみぎはに芭蕉ばせをの句碑くひあり。「馬をさへながむる雪のあし

たかな」の句を刻す。これは甲子かつしぎんかう吟行中の句なれば、名古屋あ

たりの作なるべし。それを何ゆゑに刻したるにや。因ちなみに言ふ、追お

分ひわけには「吹き飛ばす石は浅間あさまの野分のわきかな」の句碑あるよし。

八、輕井沢の或骨董屋こつとうやの英語、——「ジス・キリノ（桐の）

・ボツクス・イズ・ベリイ・ナイス。」

九、室生犀星むろふさいせい、碓氷山うすひ上よりつらなる妙義めうぎの崔嵬さいくわいたるを

望いはくんで曰めいぎさん、「妙義山と言ふ山は生姜しやうがに似てゐるね。」

十、十項だけ書かんと思ひしも熱出でてペンを続けること能あたは

ず。

（大正十四年十月）

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテニアの皆さんです。

病牀雑記

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>